

教育開発センターが取り組んでいる課題と活動状況

教育開発センター所長 山本 一雄

教育開発センターの役割は大きく分けて二つあります。一つ目は教学マネジメント支援、二つ目は学生への学習支援です。教育開発センターのメンバーは週に一度のミーティングを通して、教職協働で連携を取りながら活動していますが、外からは見えにくい事柄も多いので、教育開発センターが取り組んでいる課題と活動状況を紹介いたします。

一つ目の教学マネジメントの支援活動は、実は多岐にわたっています。と言うのも、教学マネジメントとは、大学がその教育目的を達成するために行う管理運営のことを指すからです（「教学マネジメント指針」（中教審大学分科会2020年）参照）。具体的にその管理運営は、(1)「三つのポリシー」（ディプロマ・ポリシー：DP、カリキュラム・ポリシー：CP、アドミッション・ポリシー：AP）に基づく体系的で組織的な教育の展開、(2) 学位を与える課程（プログラム）共通の考え方や尺度に則っての学修成果・教育成果の点検・評価（アセスメント）、(3) FD・SDの高度化、教学IR体制の確立、(4)学修成果・教育成果の公表、から成り立ちます。

本学でも2017年度に「三つのポリシー」が導入され、学修者主体の「何ができるようになるか」を具現化する教育が進められています。しかし、そのアセスメントの方法が確立されておらず、三つのポリシーに沿った教育の運用のPDCAサイクルが回っていないのが現状です。以前は、124単位修得すなわち学位という考え方でしたが、現在の「学位プログラム（学位のレベルと分野に応じて達成すべき能力を明示し、それを修得させるように体系的に設計した教育プログラム）」という考え方では、学修成果の可視化（定量化）が求められるためです。教育開発センターが事務局となって、現在取り組んでいる課題の一つが、まさにこの三つのポリシーのアセスメントを行うことです。

では、何が難しく今までできていないのでしょうか。DPに掲げられている学修成果はリテラシー要素とコンピテンシー要素に分けられます。知識を活用して課題を解決する能力であるリテラシー要素は、授業評価で定量化しやすいのですが、行動特性を表すコンピテンシー要素は、必ずしも授業だけで培われるものとは言えず、学修成果として定量化が難しいのです。しかも、授業で扱ったから成果として認められるわけではなく、学修者が意識して達成した成果でなければ学修成果・教育成果とはならないのです。今年度は何とか、アセスメント・ポリシー（評価の方針）の案が作成できましたので、これから、三つのポリシーのアセスメントを行い、PDCAサイクルを回していきます。

また、以前から教育開発センターが担ってきた重要な業務にFD、授業アンケートの実施などがあります。FDについてはこのセンターニュースの別ページにて詳細を報告します。

二つ目の学生への学習支援にも教育開発センターは力を注いでいます。教育開発センターが管理運営している基礎教育支援センターでは、各学期終了後に関係者全員が集まって研修会を開いており、学生への学習サポートを充実させる不断の努力を続けています。また、特別専攻学生のサポート（インターンシップ、TOEIC、文章表現などを含めた学業面でのフォロー、成績管理など）、ピアサポート（学生による学生支援活動）の支援、SCOT（学生に授業観察させ、教員への授業支援をする仕組み）活動の支援なども行っています。

オンライン授業研究会 報告

教育開発センターでは、学長・オンライン授業検討会との共催により「オンライン授業研究会」を設け、本学におけるコロナ禍でのオンライン授業の振り返りと検証を行うとともに、今後の授業の在り方について検討してきました。

2020年10月に第一回研究会を開催した後、計6回の研究会が開催されており、manaba-course「オンライン授業検討会」(<https://kaitc2.manaba.jp/>)には、研究会当日の動画・資料・質疑応答、manabaの使い方など授業での学修支援に役立つ情報が公開されています。以下、概要を記しますので、是非ご参照ください。

【第1回研究会：学生調査から見えてきたこと】 2020年10月16日 当日参加者 55名・513 アクセス

「学生調査から見えてきたこと」 小田貞宏（教育開発センター）

前期末に実施した「学生から見た良いオンライン授業アンケート」を定性的に分析し、学生視点でオンライン授業に求められているものを整理しました。

【第2回研究会：オンライン授業での設計と工夫】 2020年10月23日 当日参加者 48名・290 アクセス

「オンライン授業での設計と工夫」 伊藤勝久（教育開発センター）

看護学科の初年次教育科目「スタディスキル」において実施したオンライン授業の設計・運営上の戦略と戦術について整理しました。

【第3回研究会：オンライン授業の実践的 Tool 活用術】 2020年10月30日 当日参加者 53名・271 アクセス

「オンライン授業の実践的 Tool 活用術」 西村広光（情報メディア学科 教授） 稲葉達也（情報工学科 教授）

岩田 一（情報ネットワーク・コミュニケーション学科 准教授） 長 聖（情報メディア学科 講師）

オンライン授業を実践する上で便利なツールの紹介です。manaba course、zoom、Teams、Slackの活用法について説明していますので参考にしてください。

【第4回研究会：同期・非同期型オンライン授業の実践例】 2020年11月13日 当日参加者 48名・199 アクセス

「manaba コースや moodle を活用したオンライン授業の実践例」 神谷克政（基礎・教養教育センター 准教授）

「オンデマンド授業のための動画作成」 土谷洋平（基礎・教養教育センター 准教授）

「オンラインリアルタイム授業の実践例」 山本一雄（基礎・教養教育センター 教授）

基礎・教養教育センターの3名の先生方から、各々の授業での工夫や実践例についてお話をいただきました。

【オンライン授業公開】 2020年11月20日公開

E科2年専門基礎導入「環境・エネルギー」第4回授業 瑞慶覧章朝（電気電子情報工学科 教授） 146 アクセス

「学生から見た良いオンライン授業アンケート」の結果、多くの学生から支持を得た授業の担当者から後期授業の実際を公開していただきました。オンラインならではの工夫やリアルな指導の実態などを窺うことができます。

【第5回研究会：教員アンケートから見えてきたこととこれからの本学オンライン授業】 2021年3月26日

当日参加者 82名・287 アクセス

「教員アンケートから見えてきたこと：対面授業に活かすオンライン授業」 小田貞宏（教育開発センター）

「教員アンケートの帰納的分析：これからの学修支援に向けて」 伊藤勝久（教育開発センター）

「来年度のオンライン授業環境」 西村広光（情報メディア学科 教授）

SCAD・グラウンデッドセオリーによりデータを質分析し、現状の問題を分析しつつ今後あるべき本学の教育の姿について議論していきました。

【第6回研究会：オンデマンド授業・HyFlex 授業の実践】 2021年10月22日 当日参加者 49名・177 アクセス

「オンデマンド授業の設計と運営」 伊藤勝久（教育開発センター）

「HyFlex 授業の実践と体験」 西村広光（情報メディア学科 教授）

オンデマンド授業の設計・実施上で留意すべき要素について整理するとともに、本学で利用可能なHyFlex授業設備の説明を行いました。研究会後に小・大規模教室を想定したHyFlex授業体験会を実施しました。

ICTの教育利用はコロナ禍の環境で一気に身近なものとなりました。数年前なら、誰もが普通にZoomで授業を行いLMSで課題を管理することなど、遠い未来のことと信じて疑わなかったでしょう。今や常識となったこれらの事象を前提に、学生・社会・行政は要求し、大学の授業・カリキュラムはその深化と進化を余儀なくされています。大学教育は、今、まさにここでの判断や行動が数年後には可視化され、その客観的な比較から個別の大学が評価される、そういう厳しい現実の中にあります。（伊藤勝久）

2021年度 教育力向上ワークショップ 報告

「教育力向上ワークショップ」は2017年6月に新採用教員研修会を補完するプログラムとして初開催された後、翌年度からは主として教員個々の授業改善のためのトピックをテーマに掲げ、年間8回の計画で開催されてきました。

昨年度はコロナ感染症拡大の影響で6回の開催に留まったものの、2017年度以来、累計35回開催され、この間に延べ615名の教職員が参加してくださいました。初めて教壇に立つ先生方には役立つ知識・技能を提供できること、古参の先生方には日頃の取り組みを振り返っていただける場であることに留意しつつ、内容・活動の設計を行っています。

- 【第1回 授業設計のための到達目標と評価の設定】伊藤勝久 2021年4月30日(土) 13:00~15:00 参加者 29名
活動：授業で狙う学修成果（知識・技能・態度）に応じて適切な動詞を用い「授業目標」を設定し、それに対応した「評価方法」を設定する。
- 【第2回 学生の主体的な学びに向けた授業の設計】伊藤勝久 2021年5月22日(土) 13:00~15:00 参加者 25名
活動：学生の「学習プロセス」を意識した授業設計方法を身に付け、学修者の主体性を育むための「アクティブラーニングの技法」を自己の授業に取り入れる。
- 【第3回 授業設計のための知識構造理解と課題分析】伊藤勝久 2021年6月26日(土) 13:00~15:00 参加者 20名
活動：授業で狙う学修成果（知識・技能・態度）に応じた課題分析法を用い、授業内容の骨子（学生がいつ何をどの範囲まで学修する支援をどのように行うのか）を作成する。
- 【第4回 ルーブリック評価入門】岡崎昭仁 (V) 2021年7月24日(土) 13:00~15:00 参加者 27名
活動：成績評価の意義を形成的・総括的観点から確認するとともに、「ルーブリック」を用いる意義と利点を理解し、「ルーブリック評価表」の素案を作成する。
- 【第5回 manaba 活用入門】神谷克政 (K)・伊藤勝久 2021年10月2日(土) 13:00~15:00 参加者 25名
活動：manaba courseの「コース」上で、「コンテンツ」「respon」「レポート」「小テスト」「ドリル」「成績」機能を概観し使用する。
- 【第6回 学生の興味を喚起する授業デザイン】伊藤勝久 2021年11月6日(土) 13:00~15:00 参加者 19名
活動：学生の興味を導くための要素を収集整理した「ARCS表」を用いて自己の授業を分析し、より魅力的な学修支援が行えるよう授業の素案を作成する。
- 【第7回 授業のお悩み語り合いませんか?】藤村陽 (K) 2021年12月18日(土) 13:00~15:00 参加者 23名
活動：学生の心理状態に寄り添うことの気づきを得つつ、自己の授業で感じている困難や悩みを出し合い、工夫できることについて語り合う。
- 【第8回 カリキュラム・マネジメント入門】伊藤勝久 2022年1月22日(土) 13:00~15:00 参加者 25名
活動：カリキュラムを構成する基本的な概念を再確認するとともに、カリキュラムを健康に維持・改善していくために科目担当者がなすべきこと、考えなければならないことを考察する。
- 【第9回 ティーチング・ポートフォリオ・チャート作成ワークショップ】岡崎昭仁 (V)
2022年2月26日(土) 13:00~16:00 参加者 16名
活動：ティーチング・ポートフォリオ・チャートの作成をとおして自己の教育活動を可視化し俯瞰することにより、自己の教育者としての在り方について、理念を見出し方法を吟味することから考察していく。
- 【第10回 研究指導を考える】岡崎昭仁 (K) 2022年3月22日(火) 10:30~12:00 参加者 25名
活動：昨今の大学を取り巻く環境から「研究指導」の意義や倫理的な規範について考察するとともに、これまでの自己の研究指導のスタイルを振り返りつつ語り合い、今後工夫できることについて考察する

本ワークショップの設計・実践には、受講者が、①持ち帰ることができる具体的なものを提供できるようにすること、②知識・技能を提供する時間とそれを斟酌するための活動(振り返り・話し合い)の時間にメリハリをつけること、③和やかに学び合える場とすること、に意を用いています。新たな企画や要望等ございましたら、是非お聞かせください。(伊藤勝久)

新しい学習指導要領について

新たな高等学校学習指導要領が4月から実施されます。学習指導要領は総則、各教科、総合的な探究の時間、特別活動で構成されています。教科については地歴科と公民科で大幅な科目組み換えがありました。数学、理科、工業については科目構成に大きな変化はありません。本稿では総則をもとに今回の改訂の趣旨、特徴を記します。

1 改訂の趣旨、特徴

「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン(答申)」(2018 中央教育審議会)では、予測不可能な時代の到来に向けて、2040年に必要とされる人材の育成とそのため的高等教育の役割について、「多様性への対応と協働、SDGs、Society5.0」等をキーワードとして提言し、また大学で何を学び身に付けることができるのかが明確になっているかを問うています。学習指導要領は、時代に適合した生徒の育成に何が重要かという観点からほぼ10年ごとに改訂され、今回の改訂では「生産年齢人口の減少、急速なグローバル化、絶え間ない技術革新」等から予測困難な社会を生き抜く力、多様性への対応と協働という語句が随所に見られます。2040年は、まさしく彼らが社会の主体となる時期です。グランドデザイン、学習指導要領ともに、予測不可能な時代であるからこそ、基礎的で普遍的な知識や思考力という「汎用的な能力」の重要性が示されています。

2 「主体的・対話的で深い学び」

知識・技能のみならず思考力・判断力・表現力等を重視した学力観(前回改訂の際に示された「確かな学力」)を基盤とする「生きる力」の育成は今回が初登場ではなく3回連続の登場です。「生きる力」とは、確かな学力、豊かな人間性、健康・体力により「困難に直面する可能性を低くしたり、直面した困難への対処方法を見いだしたりできることになる力」とされています。昔からあった「知・徳・体」が、予測困難な時代への対処をまとめて「生きる力」になりました。

知識・技能とともに思考力・判断力・表現力が大切というのも3回連続していますが、最初に登場した1999年改訂では、その後のルーブリックによる観点別評価やアクティブ・ラーニングの浸透をめざす布石として、思考力、判断力、表現力等を過度に重視するあまり知識・技能を軽視する傾向がありましたが、今回の改訂では知識・技能を正當に重視しています。

知識・技能に基づき思考し判断し表現する。この思考・判断・表現に基づくあらたな知識・技能の獲得と、自分の課題として主体的な課題設定、さらに他者との対話・協働による思考の多様化・深化と課題の解決、さらに新たな知識や技能の獲得というスパイラルで探究的な学習の深化を総則は示しています。これが今回の改訂の最大のキーワードである「主体的・対話的で深い学び」です。

3 一人ひとりの得意なところを伸ばす教育

多様性の対応とは一人ひとりへの対応に他ならず、その得意とするところを伸ばすことを今回改訂された学習指導要領では重要視しています。従来から高校の現場で意識はされてきたものの、これはかなり困難な課題です。実現に当たっては、一人ひとりの関心に沿った課題解決型の学習が、今回登場した総合的な探究の学習は、「主体的・対話的で深い学び」の一形態ということになります。

学習指導要領が改訂されても、旧態依然とした授業を行う教員がいたりもして、あまり変わらぬと実感しないということがよくあります。一方で30数年も勤めると、実は高校の授業、評価がずいぶん変わったものだという事に気づかされます。4月に高校に入学する生徒が大学生になるのは3年後ですが、案外早く探究心のある者がやってくるかもしれません。

(教育開発センター カリキュラム・コーディネーター 小田貞宏)

あとがき：新学習指導要領では学修者主体の教育をより深化させようとしています。また、教育開発センターが開くFD(オンライン授業研究会、教育力向上ワークショップ)も参加者主体の「FDを通して参加者が〜できる」を目標に企画し、実施しています。とはいえ、主体であるはずの参加者の数が今一つです。教職員の皆様の積極的な御参加を期待していますし、参加したいと思えるFDを企画していきたいと考えています。* 問合せ先:教育開発センター(KAIT HALL 2F, edc@kait.jp) *バックナンバーはセンターホームページで(所長 山本一雄)